

ば、必ず守るべきことは、年内から5月頃までの栄養成長期は草丈が40~50cm台で少なくとも60cmまでに刈り取ります。穂が出はじめると分けつが劣ってくるので倒伏しない程度まで伸ばして刈り取ってもよいが、あまり高くなると茎が延びて収量的にも、栄養価においても損となります。

刈取り時の高さはあまり低過ぎると次の伸びがおそいので、5月頃の節間が伸び始めるごろまでは地上5cm以下にならないように気をつけることです。

テトリライトの特色は、伸長早く、刈っても、刈っても再生力が強い点です。再生力が発揮されるのは、早播きをした場合で、晩播きではその長所が充分に出せません。すなわち、高く(長く)伸ばすべき草ではなく短草として用うべき草です。したがって多回刈りが有利であり、その上永続性があり数多く何回も刈れることは、青

刈り連続給与に当って絶対的な強みであります。

以上、新しい飼料作物テトリライトについて、主に単播に重点をおいて、特性と栽培の概略を述べましたが、とくに暖地では、比較的優良な永年草地でも長年間良好な生産力を保つことは困難であります。わが国では四季に格然たる差がありますし、冬季に乾燥し、夏季は熱帯よりむし暑く、したがって、欧米式の永年牧草を栽培しても高度の生産が望めず、2~3年で生産力が落ちてまいります。このような生産力の低下を抑えるためにも、単播草地のみでなく、輪作や永年草地としてもテトリライトを取り入れ、冬草、夏草をうまく利用することによって生産力を上げ、多面的に利用し、永年牧草地的な効果を与え、牧草増産の実をあげていただきたいと思う次第であります。

北海道の冷害年の合理的な大豆栽培法

何年かに一度は北海道は冷害に見舞われ、その度に農作物は被害を蒙るが、畑作の重要な作物として大豆、小豆も例外ではない。大豆の場合の冷害に対処すべき栽培法について検討されていることは次の通りである。

品種の選定

当然の事であるが耐冷性品種を選ぶ必要がある。現在育種された品種はかなり耐冷性を備えてはいるが、奨励普及地域外での栽培は好ましくないし、また多収を狙うあまり晩生種を用いるのも危険である。

適期播種と完全な立毛

低温年には、立毛を普通年以上に完全にする必要がある。そのためには種子消毒とタネバエ防除を行ない、同時に適期播種をすべきである。

土壌条件と施肥量

北海道の場合、冷害年には概して降雨量が多く、冷害と同時に湿害が問題になる。過湿条件は植物体の生育を阻害するばかりか、土壌病害の発生を助長することになる。だから過湿になりやすい土地では、土地改良をやっておくべきである。

施肥量については、一般に多肥条件にすれば生育が遅延し、冷害を受けやすくなるといわれているが、大

豆の現在の土地条件と施肥量では、そうした現象は多くはみられない。つまり過繁茂の害が生じるほど肥沃地の多肥栽培地はあまりなく、通常窒素過多による異常状態は別として、ある程度植物体を大きくしなければ、減収の程度がますます大きくなるといえる。

昭和39年の北農試の冷害実態調査では、生育不良型(植物体が極端に劣るもの)の冷害が多くみられている。もちろんこれには、土地条件以外の要因も多くあったと思われるが、一般的には、冷害年に施肥量を減ずるというよりも、むしろリン酸質肥料の多用により、植物体を強くすることが望ましいといえる。

これらは、普通年と別段変わった方法ではない。しかし、これは最初にことわったように、あくまで現在の土地条件と施肥量においてのことである。平年次に、大豆が完全にその能力を発揮するような方法がとられるようになれば、平年次と低温年次とはその栽培法も、はっきり変わったものでなくてはならないであろう。

本年が冷害年であるということではないが、寒冷地農業では当然留意すべき注意点であると思います。

「やさしい豆類のつくり方」より